

寒川鼠骨編「模範滑稽俳句評釈」を読む（一）

八塚一青

いわゆる「滑稽俳句」を掲げて編纂された句集は明治三十四年（一九〇一年）に佐藤紅緑が手がけた「滑稽俳句集」が初めと言われています。もちろん、滑稽な歌を集めたものはそれこそ万葉集にも収められているため、ここで話したいのはあくまで「滑稽俳句」と編者がちゃんと銘を打って集めたものになります。その後、滑稽俳句協会の八木健会長が一一四年ぶりとして平成二十七年（二〇一五年）に「滑稽俳句集」を出版されました。

今回取り上げるのは、このふたつの「滑稽俳句集」をつなぐ大正三年（一九一四年）に出版されていた第三の滑稽俳句集「模範滑稽俳句評釈」です。編者は佐藤紅緑と同じ正岡子規の門人、寒川鼠骨です。余談ですがこの鼠骨、寒川（さむかわ）として知られていますが旧・伊予三島市に伊予寒川（いよさんがわ）駅があることから本来の読みは「さんがわ」の可能性が高いと思われまます。ちなみに鼠骨には「古今滑稽俳句集」（明治四十年・一九〇七年）という著作の存在も確認できます。中身は未確認ですが、もしかすると「模範滑稽俳句評釈」の元となった句集なのかもしれません。今回、滑稽俳句協会のご厚意で貴重な「模範滑稽俳句評釈」の内容に触れることができました。この場を借りて改めて感謝申し上げます。

具体的な内容に触れる前に、まずは寒川鼠骨について少し触れたいと思います。鼠骨と聞いてまず最初に思い浮かぶのが、東京・根岸にある「子規庵」の保存に尽力した人物ということです。彼のおかげで建物こそ当時とは異なるものの子規が暮らした場所が今日まで守られてきました。鼠骨が全くの無私精神だったのかどうか諸説ありますが、結果、彼がいなければ今の「子規庵」跡は早々に消えていたのは間違いなく、その仕事は評価されるべきだと思います。彼のエピソードに触れると純粹に師である子規が好きだったことがよく分かります。濃淡の違いはあれど子規のまわりにいた虚子、碧梧桐をはじめ門人たちは皆、子規に魅了されました。その中でも鼠骨の子規愛は佐藤紅緑と一位、二位を競うほどです。この子規を心から愛した二人が揃って「滑稽俳句集」を編んでいるところが不思議でもあります。

鼠骨の著作「正岡子規の世界」には興味深い記述があります。引用します。「(子

規は)洒落文学を好み、そうした好みから俳句を作るようになったのである。従って俳句は滑稽趣味を根本とするように心得て滑稽洒落の句を多く作った」。子規と漱石が落語を通じて仲良くなったというエピソードも有名ですが子規もまた滑稽俳句から俳句の道に入っていったのです。

「模範滑稽俳句評釈」の前書きにも、鼠骨は次のように書いています。「俳諧趣味は全て滑稽、滑稽を去って俳諧なしとも言い得る(中略)狭い意義の滑稽句より入門し広い意義の滑稽に及びはじめて全俳句の堂に上る事が出来よう」。滑稽句から俳句の道を歩みはじめるのはまさに俳句の「王道」と言っています。

次回より「模範滑稽俳句評釈」に取られた具体的な句、それについて鼠骨がどのように評しているかを見ていくことで鼠骨、そして師である正岡子規、さらには俳聖・芭蕉の滑稽感を見ていきたいと思えます。